

# 哲學研究

第百八十三號

第十六卷  
第六號

カントに於ける Kritik と Doktrin の記録について

中井正一

—

カントは批判と形而上學とを區別して、前者を Kritik 後者を Doktrin の學と呼んでゐる。それが先天的に可能なるべき限に於て、對象よりは寧ろ對象一般を認識する方法に關與する所の凡ての認識を彼は超越論的 transcendental と名づける。かゝる意味の概念の體系が即彼の所謂超越論的哲學 Transcendental-Philosophie である。この所謂超越論的哲學即「理性の體系に對する豫備學 Propädeutik」は悟性使用が成立するために絶對に必要な思惟規則即規準 Kanon を規定するの意圖をふくむ。すなはち、悟性がそのいかなる對象に向けられてあらうともその對象とは無關係に取扱は

んとするものである。批判 *Kritik* とは即それである。かゝる論理學をカントは一般、  
 的、悟性使用の論理學として、特殊、的、悟性使用の學と判明に區別せんとする。後者は  
 或特殊の對象に對してたゞしく思惟する規則を規定せんことを意圖するものであ  
 る。前者即一般、的、悟性使用の論理學の規則が規準 *Kanon* であるに對して、後者即特  
 殊、的、悟性使用の論理學の規則は組織 *Organon* である。カントの用ひる狹義の意味  
 に於ける *Metaphysik* 又狹義の意味に於ける *Philosophie* とは即後者の學であつて、彼は  
 それを *Kritik* に對立して理說 *Doktrin* の學と呼んでゐる。

彼が批判と形而上學を明白に區別づけたのは一七七三年のヘルツに對する手紙  
 に於てすで見られる。そして一七八一年三月の純粹理性批判、一七八四年九月の  
 道徳形而上學の基礎、一七八七年十二月ラインホルトへの手紙、一七八九年五月ラ  
 インホルトへの手紙、一七九〇年一月—三月判斷力批判の前序より本序へと、この  
 批判と形而上學の區別はいろ／＼の出入と修正を経て結末づけられた。一七七三  
 年のヘルツへの手紙は彼が一七七一年六月及び一七七二年二月に同人にあて、出  
 された手紙の結論であつて「感性と理性との限界」への關心のもとに考察されたもの  
 である。それより殆んど二十年の間カントはこの兩者の限定に力をかたむけたの

である。そして判断力批判の序文はその最後の報告を意味する。初め「感性と理性との限界」より引起されしこの「批判と形而上學」の問題が一七八一年、八四年、八七年、八九年、九〇年と漸次そのものとして、換言すれば「批判と形而上學との限界」としての獨自の問題として、彼の腦裡を占めはじめ、最後の批判の序文にその結末を見たのである。就職論文が感性と理性との限界づけとしての一の轉回の決定的時期であつたとすれば、第三批判の序文は彼の所謂の批判と形而上學との限界づけとしての他の決定的時期であつたと呼ぶことが許されるであらう。この移行きに關して今暫く願て見たい。

\*この小論はさきに本誌に「カント第三批判序文前稿について」と題して提出せし問題の再考察であり、又その時犯せし多少の誤謬の反省でもあることなあらかじめ斷つて置きたい。編輯上倉皇、多くの重複と獨斷となおされる。

## 二

一七七〇年九月二日カントはランベルトに手紙を與へて「此の冬は純粹道德哲學の研究を経験的原理の下にでなく始め、又同時に道德形而上學を整理し完成せんとしてゐる。」……更に之に次で形而上學への考察にも着手したいと述べてゐる。一七七〇年と云へば彼の批判前期の思想の清算されし年であり、その冬の彼の意圖が

道徳形而上學の完成と、形而上學一般への考察の着手にある事は深い興味である。この事實はかの批判の意味の根柢が唯獨斷論への對立とのみ考察さるべきでなく、認識能力そのもの、批判として考察さるべきを忠告する。ランベルトへの手紙が多く形而上學の問題に觸れるのは、すでにランベルト自身が例へば一七六五年のカントに與へし手紙に見る如く、自ら彼自身の形而上學の完成せん事を示し、その事について論じてゐる。そして更に注意すべきことは、後にカントが用ひし様に、彼も亦、形而上學の規定する法則を組織 Organon と呼んでゐる事である。この意味に於ける形而上學並に Organon に對して、カントは構成せんとする意志に焰えてこそ居れ決して否定的立場には立つてゐなかつた。

一七七一年六月七日カントがヘルツに與へし手紙に於ては、自分が「感性と理性の限界」と題する研究に従つてゐる事、そしてそれは趣味論、形而上學、道徳學について詳述する計畫であり、冬の中にそれについての材料はとゞのへられ、すでにそのプランを立てるばかりである事を告げてゐる。こゝではカントは前の道徳學と形而上學の外に趣味論——即後の第三批判に對立する美の形而上學の部門を構成すべきもの——がその姿を初めてあらはしてゐる。勿論先の一七六五年頃のランベルトに

對する手紙の中にすでに趣味 (Geschmack) の言葉は散見するけれども形而上學的構成として成立すると考へた記録はこの時である。その意味で一七六四年にもした優美と壯美との感情に關する考察[の]時には、未だ何等批判的思想の下に考察されざるランベルトの云ふ所謂美學 sogenannte schöne Wissenschaft であつたと考へられる。その翌年の二月二十一日のヘルツに與へた手紙では、この趣味論は感情、趣味、評價力の原理が、快適、美、善に對する作用とともに或程度まで満足な研究が遂げられて、彼の云ふその著書の計畫は次の如き表をもつて表はし得るであらう。

Die Grenzen der Sinnlichkeit und der Vernunft.

I Theoretischer Theil.

1. Die Phänomenologie überhaupt.
2. Die Metaphisik, und zwar nur nach ihrer Natur u. Methode.

II Praktischer Theil.

1. Allgemeine Prinzipien des Gefühls des Geschmacks und der sinnlichen Begierde.
2. Die erste Gründe der Sittlichkeit.

そしてこの手紙で重要な事は、この形而上學の斷り書きである。彼はこの形而上

學の方法と限界について「純粹理性の一つの批判」として研究を發表したい、そしてそれは三ヶ月位の中に出版できるであらう。そしてその後「道德の純粹原理」について發表したいとのべてゐる。この三ヶ月の豫定が實に九年の遅延と研鑽を意味する事と成つたのである。

翌年の末頃のヘルツに與へし手紙では、その批判的部分が未だ成立しないのみならず、むしろその重大なる擴大と、更に形而上學の組織の變化があらはれてゐる。即ち次の如き表と成るであらう。

### I Kritik der reinen Vernunft (Transcendental-Philosophie)

#### II Metaphysik.

##### 1. Metaphysik d. Natur.

##### 2. Metaphysik d. Sitten.

この一年をへだてたるカントの思想の變化はまことに問題に満ちてゐる様にはれる。と云ふのは、この表の中に於て、形而上學の部門から「情趣の感情と感覺的慾情の一般的原理」についての項目が消滅した事である。すでにカントが前年にそれを提出して居り、「美と崇高の感情について」論じ、論理學の講義の中には趣味論の項を

もつにかゝはらず、今形而上學にその姿を没したるは何を意味するであらうか。

この表では批判と形而上學、その後者は只二部である。第三批判の序文でも、*Einleitung*と *Doktrin* を分ち、その後者は只二部である。そして批判が三部である。この判然たる一致は、すでにこの年に遠き見通しがカントに於てなされたのであるか即感情の學がすでに一つの批判の體系の中に加へられたのか、そして形而上學としての位置を失つたのであるか、或は一つの偶然か、大きな問題と成るであらう。何にもせよ、感情の學は一七八七年ラインホルトに與へし手紙まで、十四年間カントの思想の記録の中には姿を見せない。そしてそこで始めてそれは批判と形而上學の二つの部門に各々その位置をもつてゐる。これでもつて見れば、この一七七三年の手紙では、感情の學は深い疑問の中にカントの體系から影をかくしたと云はなければならぬ。

一七七七年八月二十日ヘルツに與へし手紙では、彼の思想が種々なる哲學的問題に向つてこれまで斷片的であつたものが漸く體系的に成つて來たこと、全體的に成つたことを述べ、しかしその完成について常に障害の石と成るものは即純粹理性批判である。そしてそれを除くために仕事を急いでゐると述べてゐる。云はゞ體系

的形而上學が凡そ目安がつきながら、その豫備學としての批判のみが困難な途を辿つてゐたのである。そして一八八一年三月に至つて、この豫備學が彼の手から脱したのである。これは彼にとつては批判の組織の問題の提出の記録と見らるべきであらう。

### 三

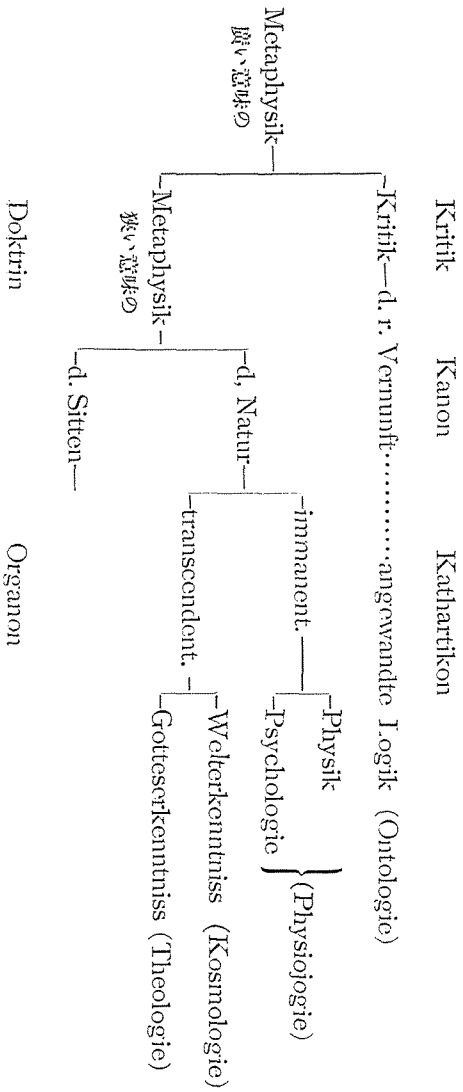
彼はこの第一批判の展開に於て、初めて Kritik と Doktrin との間の判明なる區別を要求する。「その區別は第一節に於て述べたが如きものである。即對象、そのものに向つての認識、それが形而上學、狹義の意味の哲學であり、その對象一般を認識する方法に向つての再認識、それが批判である。前者が Doktrin の學であり、後者が Kritik である。前者が Organon であるに對して、後者は Kanon である。この Kritik 即一般的悟性使用の論理學が分れて二と成る、純粹論理學 reine Logik と應用論理學 angewandte Logik が即それである。前者に於ては悟性活動の従ふあらゆる經驗的制約、例へば感官の影響、構想力の關與、記憶の法則、習慣の力、性情など、従つて偏見の源泉のみならず一般に我々に認識を與へるもしくは與へると見做さるゝあらゆる原因は顧慮されないのである。何故と云ふに此等のものは悟性使用の或事情の下に於いての



み悟性と關係し、そしてその事情を知るために經驗が必要とせられるから。すなはち一般的純粹論理學は先天的原理のみを取扱ひ、悟性と理性の使用の形式的なるものにのみ關してその規準 Kanon を規定するものである。反之應用論理學は主觀的經驗的制約のもとに行はれる悟性使用の規則を問題とするが故に此學は對象の區別と無關係に悟性使用を問題とする限りに於いて一般的であるとは云へ本來經驗的特殊原理を含んでゐる。故にそれは悟性一般の Kritik に於ける Kanon ではなく、又特殊科學の Doktrin としての Organon でもなく單に *gemain Verstand* の洗滌劑 *Kathartikon* にすぎないのである。<sup>(1)</sup>應用心理學と云へば一般的には普通純粹論理學の練習的作用 *gewisse Exerzition* と云ふ如き意味をもつてゐるけれどもこゝに於ては悟性の *in concreto* なる使用の規定を意味し、我々が悟性使用にあつてそれを妨げ或は促進する處の經驗的にのみ知り得る主觀の偶有性の研究である。例へば注意並にその障害又は結果、誤謬の起源、疑惑、躊躇、確信の状態等をそれは取扱ふ。純粹論理學の此學への關係はあたかも自由意志の必然的道德法則一般のみをふくむ純粹倫理學の、この法則を感情、性情、情慾の障碍のもとに考察する處の本來の道德論に對する關係と同様である、後者は決して論證されたる眞の學とは成り得ない、何故ならそれ

は應用論理學に於けると同様に經驗的並に心理的原理を要求するからである。

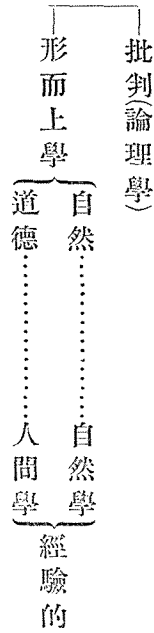
カントはこゝに學問の二つの領域 Kritik・Doctrin の二大別をなし前者 Kritik の中には純粹論理學と應用論理學としての in concreto なる學とを分ち純粹論理學の規則は Kanon であるのに對して、應用論理學のそれは常識の洗滌劑 Kathartikon にすぎない。そして、この Kritik に對して形而上學はウオルフの體系にならつて次の如く配列される。(三)この表では批判、形而上學の何れに於ても感情の學はその領域を失つて



ゐる。むしろその脚註に見る如く美の批判的評價を理性原理の中に導きその規則を學にまで高めんとする如きことはかのバウムガルテンによつて試みられたる誤まれる努力を出でる事はできない。何故ならかゝる規則もしくは表徴は、その起源から見て、たい経験的であつて決して先驗的原則の用をなすことは出来ない。只彼が第一版で保留したのは趣味判断がそれ等のものゝ本來の標準と成ることである。この考へ方は、一七八七年四月の第二版の出版にあつては、多少の讓歩をもつて、*ästhetik*の言葉は或時は先驗的意味に——感性論として——或時は心理的意味に用ひ得ると述べてゐる。即ウインデルバントが指摘する様に、美の批判的位置は未だ決定してはゐない。しかし、興味多い事は、この二版が出て僅か二ヶ月後シュツツに與へし手紙では、實踐理性の批判の仕事を終り、ヘルデルのイデーの批評の傍ら趣味の批判の根據について研究を進めん事を告げてゐる。更にそれに後るゝこと六ヶ月ラインホルトに與へられたる手紙に至つて初めて趣味の批判が可能であるとの考へ方に辿りつき得たのである。かくて一七八四年はカントの思想の大きな飛躍を記録してゐる。

こゝに一つの私達の疑問とすべきことは一七八四年九月にその稿を手より放し

たと云はるゝ「道德形而上學の基礎」に於ける問題である。學の領域の分類については大體第一批判に於けると同じ叙述をなしてゐるけれども、只異るのはそこでは純粹論理學に最早經驗的部分が消え去つて、寧ろ形而上學 (Naturlehre, Sittenlehre) には先驗的原理により説明する部分があると、同様に又經驗的部分が有り得る。例へば前者が Moral であれば、後者は Praktische Anthropologie とするが如きである。かくしてこゝでは應用的即經驗的部分は第一批判の時とは反對に、Kant の部分にあるのではなくして、Doktrin の部分に在るのである。それを表示するならば、



こゝでも趣味の批判の可能については殆んど觸れてゐない。觸れたとしても或箇所て用ひし比喩に於ける如く Kunst を單に勞少くして功多からしめるところの Technik として工業乃至商業と同様に職業的地位に置いてゐるにすぎない。

- (註) (一) Kant's Werk (カント版)..... III S. 80
- (二) Ibid ..... S. 82

四

ともあれ、純粹理性批判第一版一八八一年より、第二版一八八七年四月二十三日までは相當の思想動搖を経ながら表面は僅かな變化をもつて過されてゐる。そしてその年の六月二十五日のシュツツへの手紙に於て彼は趣味批判の根據について研究の手を染めたる事を報告し、同年十二月二十四日ヘルツに自分の如き年になつてはすでに哲學的仕事は重いこと、そして形而上學に早く目鼻をつけたい事を慨いてゐる、その四日後、十二月二十八日ラインホルトに與へたる手紙でもつて趣味批判が可能と成つたのを知るのである。

彼はこの手紙に於いて、心情の中にこれまで觀察した認識諸能力の分析的構成を發見し、それを組織化する事に成功した事をのべてゐる。これを表にするならば、

(批判)

(形而上學)

(能力)

純粹理性批判……………理論哲學……………認識能力

趣味批判……………目的論……………快不快の感情

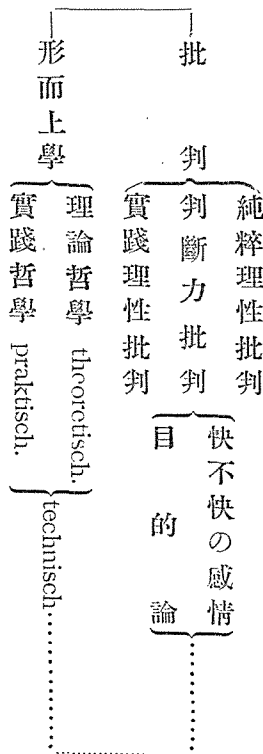
實踐理性批判……………實踐哲學……………慾求能力

カントに於ける Kritik と Doktrin の記録についで

この表ではついに批判は三つの體系を持つて来る。そして批判に於てのみならず、形而上學に於ても亦新しきトリニテイトが完成する。しかし、こゝで注意すべきは、この目的論が直ちに判断力批判に對應するその形而上學的部門と考へるは可成の用心をしなければならぬ。何故ならば彼の目的論には主觀的目的論と客觀的目的論のそれ自身の體系構成があるからである。しかし彼の言葉の配列の仕方、不快の感情への對立はそれが後に彼が否定するに至つた趣味批判の形而上學的部門に位置づけられるべき可能は充分にもつてゐるといはなければならぬ。それ等のものゝ外に、この表では未だ判断力なるものが、その能力に於てのみならずその組織の何處にも位置づけられてゐない。之がその位置をもつに至るのは、それより二年後、一七八九年五月十二日ラインホルトへの手紙に於いて記録せられる。こゝでは趣味批判は判断力批判の一部門にしかすぎなくなる。そして第三批判への道筋はこの時漸く出來上るのである。そしてその翌年一月から三月までの間に書いたと云はれ、一度書いて餘り長すぎたので棄てられた判断力批判序文前稿に於て、始めて美及目的論についての確固な考へ方が出來上つたのである。シギスモン・ベツクが勝手に取捨變形し「哲學一般について」と題して彼の全集に加へた文章が即そ

れである。その取捨變形は稍々不當であり、殊に批判と形而上學の限界づけについては、その劈頭より誤謬が犯されてはゐなかつたかと私には思はれる。ベックが抄略したる第一章の劈頭に於てカントは哲學の體系を二つに分けて、形式的なる部分と、或對象に向つて爲さるゝ思惟即内容的なる部分に分けて、その後者を更に自然哲學(理論的)と道德的(實踐的)とに分けてゐる。この所謂「實踐的」praktischの概念の分析から始めて、技術、Technikがカントに於て問題と成るのである。この概念は彼に於ては理論的(theoretisch)と實踐的(praktisch)の二つの概念の中間概念として意味をもつ。通俗的にpraktischの概念は例へばpraktische Geometrieとしての測地學の如く、原理的なるものより導かれる推論的なるもの Folgenとして取扱はれ、云はゞ第二次的のものとして考へられ易い、これは純粹なるpraktisch實踐の意味から遠ざかる。この混同を防ぐために、この推論的なるものを技術的technischと呼んだのである。そしてそれは理論的でも實踐的でもない判断、即 Kunstに於てのみ可能なる根據を見出すところの評價力 Beurteilungをもつて自然の對象に應接する仕方である。それは對象の事態について客觀的に規定せんとするのではなくして、自然そのものが我々の認識能力に對する主觀的關係に於て評價せられるの仕方である。こゝでは單に判

斷力が *technisch* であるのではなくして、判斷力がそれ自身の法則の下に己自身を根據づけ、しかもそれによつて自然をも *technisch* と稱するを得しめるのである。かくの如き技術の概念はそこで客觀的規定を持たないのみならず又 *doktorinale Philosophie* にも與らない。寧ろたゞ我々の認識能力の *Praxis* を導き出すのみである。この第三批判の序文前稿に於いて、ついに判斷力は形而上學よりはその姿を消して、只批判そのものとしてのみ成立することゝ成つたのである。これを表示するならば、



かくして、趣味論が形而上學的地位を占め得たのは、一七七一年六月のヘルツに與へし手紙、一七七二年二月の同じくヘルツに與へし手紙との二度僅かにその片鱗を見せたる後十五年間彼の體系からは謎の如く姿を没し、一七八七年十二月のラインホルトに與へし手紙に目的論の名によつて、疑はしくはあるがとにかく再び地位



を得たのを記録するにとゞまる。

## 五

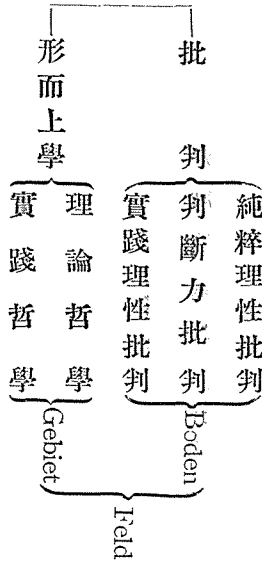
第三批判の本序はこの判断力批判に對應するその形而上學の成立せざる所以をその緒言より繰返してゐる。そして、その結論として彼の批判的仕事 *Kritik* の全部はこの書をもつて終ることを述べ、これについて、彼は寄る年波の中に僅かな時間をも惜まんがために、教説 *Doktrin* の論述に着手したいとのべてゐる。云ふまでもなく其中に於ては判断力のために特に一部門は設けられない。——何故なら判断力に關しては理論のかはりに批判が役立つのみであるから——むしろ理論的と實踐的とに區別せられる哲學の分類に従つて、さうしてやはり同様の部門に區別される所の純粹哲學の分類に従つて、自然の形而上學と道德の形而上學とがかの *Doktrin* の全部を構成することゝ成る。そして更に彼はその序文の第二節に於て未だ何れの他の文獻にも見ざる認識領域を區分する。即それは認識の三つの場所 *Feld*, *Boden*, *Gebiet* の思想である。その認識が可能であれ不可能であれ概念がその對象を持つ限りに於て、概念はその *Feld* をもつてゐる。その *Feld* の一部分の中に於て認識の可能なるものに限るそれは概念の *Boden* となる。更にこの *Boden* の一部分の中に於

てそれが法則を與へ得る限りに於てそれは概念に對してその Gebiet と成る。そして、その各々の領域に隨つて各々の認識能力が分たれる。先づ私達の認識能力は二つの Gebiet をもつ、即これは自然概念のそれと、自由概念のそれである。哲學も亦それに隨つて理論的と實踐的とに分たれる。しかるに Boden に至つてはその上に Gebiet が設立され、法則が與へらるゝにもせよ、それが現象として取扱はれない限りに於て只可能的經驗の對象の總概念にすぎない。それが悟性によつて法則付けらるゝに至つて始めてそれは理論的な Gebiet と成り、理性によつて法則づけらるゝに至つて始めて實踐的な Gebiet となる。そしてその二つの領域は永遠に一つと成ることの出来ない處の領域ではあるが、しかもそれは超感性的なる Feld に於ける叡知の Einheit の根據の上に結ばなければならない二つのものでもある。

諸認識能力の批判は客觀の側から見れば實は Gebiet なるものをもつてゐない。何故ならば Kritik は Doktrin ではなくして只吾々の諸能力の性質上彼等によりて Doktrin の打建てられることが果して又如何にして可能なりやを檢查することのみを其職能とするからである。その Feld は、彼者を制して彼等の正當なる權限の限界内に引退かしめようがために、彼等のあらゆる僭稱の盡くに涉つて擴がる。

カントはその連續を完成するために中間者としての判斷力を導入する。そしてそれが法則を與へることが出来ないまでも、特殊の原理をもつて法則を求め、それ自身主觀的アプリオリのもとに自らを支へんとすることを許さうとする。この永遠なる追放者である詩の原理の住み得る唯一の領土はカントに在つては即このGebietの底に横はる Boden の國であつたのである。これを表に示すならば、

Kritik



かくして、一七七三年ヘルツに與へし手紙にあらはれし批判と形而上學の區別がこの一七九〇年の判斷力批判の序文に至るまで十七年間、かくも多くの變遷を経ながらその困難な途を辿り來つたその跡を顧て、思惟の記録の或種の尊嚴性に觸れる

のである。物質がそれ自らの結晶性を完成する如く思惟の對象性がそれ自らの途を辿りし記録をそこに見るのである。最後にその思惟記録を再びまとめて表にしてあらはすことによつてこの稿を閉ぢたい。

一七七三年(ヘルツへの手紙)  
 純粹理性批判(超越論的哲學)

形而上學  
 自然  
 道德

Kritik

Kanon

Kathartikon

批判(超越論的哲學)純粹理性……應用論理學

一七八一年三月

『純粹理性批判』

形而上學

自然  
 超越的  
 內在的  
 道德  
 神學  
 宇宙論  
 心理學  
 物理學

Doktrin

Organon

一七八三年  
 プロレゴメナ(形而上學序説)

一七八四年九月

「道德形而上學基礎」

批判(論理學)

形而上學

自然……………自然學  
道德……………人間學

經驗的

一七八六年 自然科學の形而上學的入門

一七八七年四月 純粹理性批判第二版(第一版と同前)

一七八七年十二月

(ラインホルトへの手紙)

批判

純粹理性批判……………認識能力  
趣味批判……………快不快の感情  
實踐理性批判……………慾求能力

形而上學

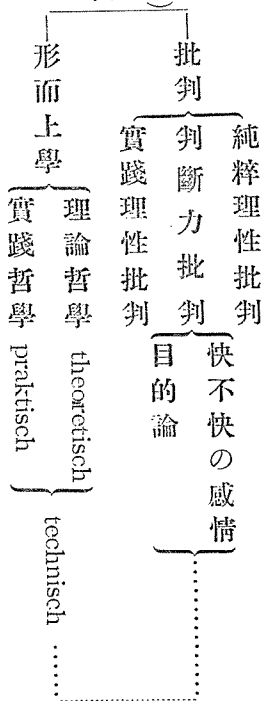
理論哲學  
目的論  
實踐哲學

一七八九年五月

(ラインホルトへの手紙)

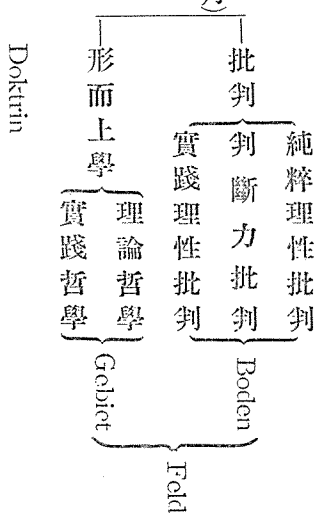
判斷力批判(趣味批判)

一七九〇年(一月—三月)  
判斷力批判序文前稿



Kritik

一七九〇年(一月—三月)  
判斷力批判序文



Doktrin